

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷 第二・三號

ヨークシャー・ラツダイトに就いて(一)……………穗積文雄

絶對主義論の悲劇……………堀江英一

『自然の法典』……………田中眞晴

「混合經濟」の構造と計畫化の方途……………馬場正雄

昭和二十六年三月

ヨークシャー・ラツダイトに就いて (一)

穂積文雄

はしがき	一、發	二、組	三、行	四、影	五、終	六、批
	生	織	助	響	熄	判
	本	次				
	號	號				

はしがき

一八一一年から一八一二年にかけて、イングランドの北部、當時の新工業地帯に、ラツダイトの名をもつてよばれる有名な機械破壊運動が発生した。それは、まづ、ノツチンガムにはじまり、やがて、マンチエスターやヨークシャーその他の地區にひろまり、それらの地方を極度の混乱におとしいれた一大事件であつた。しかし、その行動が非合法のいはゆる地下運動であり、なかまのあいだで祕密をまもることがきはめて嚴重であつたし、お

それはた側でも後難をおそれてか、あまりそれについてかたならなかつたからでもあらう、その眞相はあまりあきらかではないやうにおもはれる。すくなくとも、まだまだ、あきらかにされるべきものをのこしてゐることは、いなみがたいとおもふ。だが、それをきはめることはむづかしい。まことに、マントドのいふやうに、その解明には、とくべつの深い研究が必要であらう。そして、それは、わたくしには荷がかちすぎる仕事である。本稿はヨークシャーのラッダイトにフオカスをおはして、すこしく涉獵したところをまとめてみただけのものである。それは一つのささやかなころみにすぎない。それでも、いささかでもラッダイトをあきらかにするに役立つことができればさいわいである。

一、發 生

ラッダイトの發生の原因は機械がこれまでの労働者から職をうばつたからであるとせられる。それは、もとより、そのとほりである。それにちがひはない。けだし、われわれは、機械の特質として二つのものをあげることができる。一つは人力の節約であり、他は經驗や熟練の驅逐である。しかるに、まへのことは失業を約束し、あとのことは婦人小兒の進出を意味する。だから、これまでの労働者が機械を呪咀し、これを排撃せんとすることのむりからぬを知る。かくて、初期の發明者がしばしば迫害をかうむるをみることになる。

ひるがへつて、イギリスをながめると、そこでは、一七六〇年ころから、いはゆる産業革命がはじまるをみる。産業革命はこれをその根源においてみれば、生産における機械の適用にほかならぬ。したがつて、そこへ、これまでの労働者の機械に對する反撥がはじまるのをみることになる。たとへばハーグリーブス (John Hargreaves) の

スピニング機 (Spinning Jenny) の事件はあまりにも有名な挿話である。また、一七九九年のランカンシャの機械破壊運動はマンントーのくはしく引くところである。わたくしも、ここに、ラツダイトの運動にさきだつこと二十年ころの一の事例を加へておかう。

『一七九一年、マンチェスターの人、グリムシャウ (Grimshaw) なるものが、人からブレイズ新僧正 (New Bishop Blake) とよばれてゐたカートライト (Dr. Cartwright) と蒸氣機関の動かす織機 (loom) 四百臺をマンチェスターにすえつけることを準備した。グリムシャウは數百通にのぼる脅迫状をうけとり、一再ならず狙撃をうけ、かれの妻はたへざる恐怖のためほとんど憔悴におちいり、工場がたち、四百臺の織機がすえつけられ、機械の部分がそろふと、工場も織機も一再烏有に歸した。たれが放火したかはいふまでもあるまい。グリムシャウはこのために破産し、二十年の後までも、ブレイズ僧正めが、うまい話で自分を誘惑するより前に焼けてゐてくれたらよかつたにといひあるいてゐるさうである。』

ラツダイトの中心地方においては、織維工業や羊毛工業において機械の使用がさかんとなるにつれて、労働者の機械に對する反感もますますつひ、さきのランカンシャ事件のごとき暴行がしばしば發生した。だからラツダイトの連中が、機械の生産における適用によりて職を奪はれることをおそれ、また、そのために、彼等の生活状態が低下することをおそれたといふことは、いふまでもないところである。わたくしは、それを、しばらく、ヨークシャーのラツダイトの場合について、すこしくちあいつて、うかがつてみよう。

たとへば、一八一三年一月四日、月曜日のヨーク城中に開かれたヨークシャーにおけるラツダイトの裁判においてトムソン男爵 (Baron Thomson) はその論告の中で、彼等の『最初の目的はただ、生産における努力を節約する目的で發明せられた機械の破壊であつた』といひ、そして、それは『おそらく、機械の使用は労働に對する需要を減少せしめ、その結果、賃銀の低下、乃至、失業を招來すると説得することによつて、労働者をまどはし、

騷擾・犯罪をなざしめんとする、邪惡なる意圖を藏する人によつてたくまれたる謬想である。』といつてゐる。そのことはラッダイトの連中がかかる觀念によりてうごかされたであらうことを示すに足るであらう。さらに、後に引くラッダイトの網領に『われわれの手段は説得であり、要求の呈示であるが、必要な場合は、冷酷無情なる傭主達が、われわれの手の勞働に代へて使用せんとしてゐるかの人力の競争者たる機械の撤去である。』といつてゐるのをあげることが出来る。

なほ、機械が従來の手工業者達の經驗や熟練を無効・不要にし、すくなくとも、その重要さを滅殺し、そのため、それらが女子や兒童の勞働によりてとつてかはられるという現象が、實際、いかに、あらはれてゐたかは、エールンスト、トレル (Ernst Toller) の『機械破壊者』におけるつぎの會話がよくそれをしめしてくれるとおもふ。

第一の男の子 わたしの弟は四歳で、すでに織機を操つてゐるよ。

第一の女の子 テツヂイは、やつと、あるけるか、あるけないくらゐよ、それで一日三ペンスもうけるわ、眞正銘ほんまよの三ペンスを。

また、

ヘンリー 機械はあなたがたを待つてゐる。無意味なストライキを止めなさい。そうすれば、明日はパンが得られる。わたしには、やすい手がたくさんある。しかもそのどれもストライキはしない。

女 達 われわれのみんなを、また、やつとてくれますか？

ヘンリー お氣の毒だが男子はやとへない。だが、子供はみんなやとひまじやう。三四歳の子供でもけつこうです。それからわかかつて、器用な娘さんを。きまわけをよくしなさい。あなたがた。仕事がデリケートなのでとくに指が柔でなければならぬのです。

そして、かかる現實が認識にのぼることは、いなむべからざるところでなければならぬであらう。はたして

當時の冬のある一夜、牧師のウェプスター (Webster) が、問屋のバムフォース (Banforth) に、つぎのやうにかたつてゐるのを、きくことができる。

『あなたはこれらの新仕上機 (new finishing frame) の一臺は四人分の働きをするといはれる。あるひは六人分の働きをするかも知れぬ。また、人のはなしでは、熟練も世話もいらぬ機械もあるといふことである。それはほんたうであるかも知れぬ。わたしにはわからん。しかし、おお、その時代が来れば、それはこの丘やこの地方全體にとつて、なんといたましいことであらう。今日相懸な家に住み、悪い時世とはいひながらも、なほ、妻子を養ふことのできる人達は一體どうなるか？』

かくのごとく、ラツダイトが機械のためにその生存がおびやかされることの故に、立つて機械破壊の舉に出るにいたつたことは、疑ふべくもない。しかし、労働者が機械を呪咀し、これを破壊することは、なにもことあたらしいことではないことすで見たところのごとくである。そしてイギリスにおいてはこれよりすつとはやくより、機械は生産に適用されてゐる。もちろん、だから、われわれはこれよりすつとはやくより機械破壊行爲を見ることができると、また、すでにみたところのごとくである。だがラツダイトのごとく、そのやうに大規模なものがおきたのは、これまで、まだみぬところであつた。それではそのやうなものをおこさしめたところのものは、なんであつたであらうか。それが問題でなければならぬことになるであらう。それではそれはなんであつたであらうか。

この間に對して、われわれの頭に、まづうかぶであらうところのものは、かのフランス革命の影響でなければならぬであらう。一衣帯水のかなたにおこつたあの大革命がこの島國に大きな影響をおよぼさぬはずはあり得ない。それはこの國をゆりうごかした。急進過激な思想がたちまちにこの國にも燃えあがり、燃えひろがつた。へ

インの『人權論』やゴドウインの『政治上の正義』が人心を魅了した。かういへば、あるひは、それは一部知識人についていへることである、一般労働者のことではない、と、いはれるかも知れない。しかし、そうばかりもいへないであらう。ゴドインの『政治上の正義』が樞密院で問題となつたとき、宰相ピットが『三ギニーの本は、三シリングをものこし得ぬ連中には、なんらの害をあたへはしない』といつたので、あやふく彈壓をまぬがれたのである。しかるに、労働者等は、たがひに貯金をあつめて、この本を買ひもとめ、樹陰または酒場などで、さかんにこれに読みふけつたと、つたへられてゐる。

げんに、かつてラッダイトの一員であつたベシ・オ・ビルのごときも、わかひころ、ペインの『人權論』を買つて讀み、『きわめて健全にして、かつ、適切な本』(a very sound and proper book)とこれに傾倒してゐる。さらに、このペンの従兄弟にしてヨークシャーのラッダイトのリシ・グリーダーといはれたジョージ・メラリーの¹⁴ごときペンに對してつぎのごとく論じてゐる。

『……人間の自然權はこの國ではかへりみられてゐない。財産の自然權がそれを吞んでしまつてゐる。財産あるのみだ。財産なるかなだ。……フランス人はわれわれよりも分別がある。かれらは、この世のよいものは、すべて、貴族と僧侶によつて占められてゐることを知つてゐる。かれらは、男の子であるよりも野の獸にうまれる方がよいといふことを知つてゐる。かれらは、人は労働によつて富むものであり、貴族や教會はかれらのつくつた富を享樂し、かれらには、わづかに身心を維持するに足るだけのことすにすぎない、といふことを知つてゐる。しかし、貴族や教會は黄金の卵をうむ鸚鵡を殺さぬだけの注意ははらつてゐる。そういふときもある。がときには、それをこえる。しかしながら、ふみにじられた處にも魂がある。フランスでは、かれらは立ちあがつた。かれらは、おごれる貴族どもを放逐した。』¹⁵

當時眼のあたりラッダイトの騷擾を見たバイロンは、『ラッダイツの歌』(Song of Luddites)に吟じて、

As the Liberty lads over the sea

Bought their freedom, and cheaply, with blood
So we, boys, we
Will die fighting, or live free,
And down with all kings but King Iudd.

When the web that we weave is complete,
And the shuttle exchanged for the sword,
We will fling the winding-sheet
Over the despot at our feet,
And dye it deep in the gore he has poured.

Though black as his heart his hate,
Since his veins are corrupted to mud,
Yet this is the dew
Which the tree shall renew
Of liberty, planted by Iudd: is

とうたひ、そこに革命運動を看取してゐる。さすがにすぐれた詩人の直感と讚嘆すべきでもあらうか。だが、それは、ひとり、詩人だけのことではない。一八一三年の春、ヨーク城内に開かれたラツダイトの裁判において、一月一三日火曜日、パーク氏は、ヨークシャーにおけるラツダイトの運動を、『ほとんど實際の叛逆の状態に達す』(amounting almost to a state of actual rebellion) 『17 恐るべき騷擾』(the dreadful disturbances) と断じてをり、

また、當時、他にも、これを『ほとんど、公然たる叛逆といふべき危機』(a crisis little short of open rebellion)と評してゐるのをみいだすことができる。

かうみてくると、ラッダイトの發生に、フランス革命によつてこの國にひきおこされた新思想の影響を、みとめないわけにはゆかないであらう。しかしながら、それにしても、フランス革命は、これよりさき、すでに、一七八九年におきてゐる。急進過激な思想が世をにぎはしてよりこのときにいたるまで、すでに久しいものがあるといへる。もし、機械呪咀と革命思想とだけがラッダイトの發生の原因であるならば、ラッダイトはもつとはやくおこつてもよいはずであらう。しからは、何故にラッダイトはそれより二十年ちかくを経てはじめて發生したのであらうか。かくて問題は依然として問題をのこす。そしてそのことは、ラッダイトの發生に、これらのほかに、なほ、他の理由のあることをものがたるものでなければならぬであらう。

それでは、それは、いかなるものであらうか。それについては、この時期にいたつて、機械の適用が急激に増加し、失業者の數が急激に増大したからではないか、といふことも一應考へられよう。なるほど、世の中の變化が加速度をもつて進むことはめづらしいことではない。しかしながら、イギリスが産業革命の時代に入つたのはすではやく一七六〇年ころのことである。それよりこの時期までほとんど半世紀を経過してゐる。この時期にだけとくに機械の適用が急激に増大したとは考へにくいのではなからうか。それに、それではラッダイトが一八一年乃至一八二二年の二年だけ、いはば線光火花のやうに、たちまちに燃えあがり、たちまちにしづまつたといふのが解しがたいこととならねばなるまい。あるひは、それらに對しては、ことが大きくなつたため、當局の

彈壓が苛烈をきはめ、勞働者は手も足も出せなくなつたからである、といふ説明が下されうるかも知れぬ。またあるひは、機械破壊はナンセンスであり、すくなくとも、それは大河の流を隻手で支へんとするがごときおろかしきことであることを、かれらがさとつたからである、といへるかも知れぬ。もとより、それらの説明にも一理はあらう。全然これを排するわけにも行かぬとはおもふ。しかしながら、たとへ、それらの説明に一應耳をかたむけるとしても、それだけではあまりにもこの運動の發生終熄があつけな過ぎるきらひがありはせぬか。ことに機械破壊はラツダイトの後にも、しばらくは、かならずしも、その跡をたたず、時にその發生をみるのである。かくて、すくなくとも、われわれは、このラツダイトの發生猖獗をきはめた一八一一年乃至一八一二年の時代の事情をかへりみ、そこに機械破壊運動をとくにこのラツダイトのごとき大事件にまでもりあがるにいたらしめた因子がありはせぬかと探索することが必要となりはせぬかとおもはざるを得ないことになる。

しからは、當時のイギリスの事情はいかにあつたであらうか。いふまでもなく、當時は、ナポレオン戦争とか新百年戦争とかいはれる時代で、イギリスはフランスと交戦状態にあつた。

かくて、戦争、とくに、フランス側の大陸封鎖と(一八〇六年)これに報復するイギリス側の海上封鎖のため、さらに一八〇九年にはじまる四ヶ年にわたる不作が加はつて、イギリスでは、ちやうど、このころにいたつて、食料をはじめ農産物等の物價がはなはだしく騰貴し、民衆、とくに都市勞働者の生活が困難となり、他方外國における市場がせばめられ、工業家は海外輸出品の滞貨をかかへて困惑し、それは、やがて勞働者に、しはよせせられ、その失業乃至賃銀の低下となり、さらでだに困難な勞働者の生活がますます窮迫するであらうことが推定せられる。そして、われわれはその推定をつぎの諸記述によりて立證しうるであらう。

まず、當時の農産物の價格騰貴のいかにはなはだしかつたかは、權威をほこる文書につきの記述を見ることによりてこれをたしかめることができよう。

ラツダイト蜂起のこの時期に、『あたかも時を同うして、シェフィールド・マンチェスター・マグレンスフィールドの市場ならびにその他数ヶ所において、食糧品の騰貴が原因で暴動がおこり、食料品の販賣商達は、あるひは掠奪を蒙り、あるひは市價よりもはるかに廉價に商品を販賣することを強制せられた。』¹⁾

つぎに、大陸封鎖に對する海上封鎖の勅令がいかにか不景氣を招來し、滞貨の山をきづき、工業に打撃をあたへたかは、閩秀作家シャールotte・フロンテ(Charotte Fronte)の、あたかも一八一一年乃至一八二二年の時代のヨークシャーを舞臺とせる小説『シャーリー』(Shirley)の中における、製造業者モアア(Moore)氏と牧師補のマローン(Malone)君の會話に關如とあらはされてゐる。

——わたくしはわたくしのこの商賣、わたくしの工場、わたくしの機械をけつして見すてない。

——ヘルストンにはせればそれらの三つのもはあなたの精神であり、勅令(Orders in Council)はあなたにとつては七つの大悪の別名であり、……

——そうです、わたくしはそれらのものを忌みきらひます。なぜなら、それらのものはわたくしを破滅させるからです。それらのものはわたくしに妨害をくはへます。わたくしはやつてゆけません。それらのもののために、わたくしはわたくしの計畫を遂行することができません。それらのもののためはことごとくに計畫がくるはされてゐます。

——ですが、あなたはお金持で繁昌してゐらつしやるじやありませんか、モアアさん？

——わたくしは賣れない布地で金持ちです。あそこにあるわたくしの倉庫にはいつて、品物が屋根まできつしりとつまつてゐるのを一つ御覽になつて下さい。ロークスやビーアンンだつておなじ状態です。これまでアメリカはよい市場でした。だが、勅令がきりはなしてしまひました。²⁾

しかしながら、どこにもわるく吹く風はないもので、農産物の價格騰貴は地主階級及び農民層の購買力を増大

することに成り、したがつて、そこに商品のほけ口があることもみのがしてはならない。だが、それも、一時で、結局は、この不景氣の影響の外に安住できなかつた。その間の事情はベン・オ・ピルの回想録の中にもこれを見出すことができる。²¹⁾

それから、大衆とくに労働者の窮狀はベン・オ・ピルの回想録の中のつぎの一節がよくこれをしめしてくれるであらう。

『この地方の當時の状態をつたへることはとても困難なことである。事業は極度に不良であつた。たれも着物を買ふ金などもつてゐるとはおもはれなかつた。たいていの人が食ふことに追はれて着ることはその場かぎりのやりくりするほかなかつた。たくはへ(Baggage)がなくて、その日その日の労働によつてパンをかせいでゐる人達の家庭を見るのはいたましいことであつた。それなのに一部の工業家は、現在職場をもつてゐる人達の多くを路頭に迷はすに役立ただけにすぎない機械の設置を固執してゐた。それとともに、ひとり職端機輪人(Copper)だけでなく、數マイル四方の内の労働者みんなの心の中に、不正だ、壓迫だといふ感情、悪をいさぐる氣持、がわきおこつた。そしてまづしい者はまづしい者に同情をした。かれらは、金持ち達は自分達のことをすこしもかまつてくれない、金持達の考へることは、自己の利益を追求し、ポケットをふくらませることばかりであつて、労働者達が憤死しようと、なんら意に介せぬものである、といふことを、きもに銘じて知つた。かでてくはへて、かれらはたよりなきの感にいらだたされてゐた。かれらは籠の鳥が柵にぶつつかるやうな氣持であつた。かれらは何事にもまつたく發言權がなかつたことはおわかりでしやう。かれらはただ名前だけイギリス人であるにすぎなかつた。かれらの生活は景氣のよい時でさへ、なんらかがやかしいものではなかつた。それはほとんど働くことと寝ることであつた。そしてあまりたくさん寝れなかつた。はげしい労働と安い賃銀、そして娯樂はほとんどなかつた。かれらにも、戀人もあれば友人もあつた。けどし、それらは人情の發露であるから。しかし、かれらの生活に光を與へるものはほとんど何もなくあつた。當時は人々があつまつてかれらの悲哀を表明すると、擾亂運動として迫害をうけた。かれらが集合せず、靜穩にして法律に従ふてゐると、上流の人達は、悲哀はないといつた。いな、言動になんらの暴行がなければ、ロンドンの利口ぶつた愚物どもは世は泰平上々首尾と思ひもし、口にもした。かれらに説いてわから

せようとしても、それはできぬ相談である。……ではどうすればよいだらうか。』

さらに、最後に、わたくしは、以上のすべてを總括した當時の様相を示すために、いま一度、シャールotte・ブロンテをわづらはすであらう。

『その時代は、英國の歴史、とくに北部地方の歴史においては、一つの暗鬱な時代であつた。戦争はこのときその最高潮に達してゐた。長い抵抗で疲弊してゐた。(If not weary, worn with long resistance.) しかり、そしてその人口の半分も亦疲弊して、どんな條件でもよいから平和を得たいとさげんでゐた。かれらは飢餓のために眼がくもつてゐたので、その眼には民族の榮光も價値のない、ただむなししい名にすぎず、一片の肉のために生得糧を賣るを辭しないくらいであつた。

ナポレオンのミラフ及びベルリンの大陸封鎖令 (Decree) が原因で發布せられた中立國の對フランス貿易を禁止する勅令 (Orders in Council) はアメリカを憤激させることになり、ヨーロッパの羊毛品貿易の主要市場を切り離し、その結果、それを破滅に翻せしめるにいたつてゐた。海外の小さな市場は、これはまた供給過剰におちいり、吸収力がなかつた。ブラジル・ポルトガル・シシイはいづれも二年分の供給過多であつた。この危局に際してある種の機械の發明が北部の纖維工業に導入せられ、それは、人手を非常に省くので、數千の人々を職場から驅逐し、合法的な生活手段なきままに放棄した。加ふるに收穫が不良であつた。困厄は最高潮に達した。忍耐も度がすぎると破裂する。北部諸州の丘の下には道德の地震の陣痛がもちあがるのが感ぜられた。だが、かかる場合のいつもの例のごとく、たれもたいして注意しなかつた。食料暴動が工業都市に勃發したとき、ジグ・ミル (Siegfried Müller) が燒きはられ、あるひは工業家の屋敷が襲撃せられて家財が街路に放り出され、そしてその家族が命からがら逃げねばならなかつたとき、その時でも、地方官によつてなならぬの施策が行はれることは、あつたりなかつたであつた。張本人が発見せられたこともあつたが、逸することの方が多かつた。新聞がそれについて數節を書く、そして、それでしまひであつた。被害者、その唯一の財産は労働であり、そしてその財産を喪失してしまつた被害者、働くことができず、したがつて賃銀を受けとることができず、したがつてパンを買ふことができなかつた被害者、かれらにはくるしむままに放棄せられた。おそらく、放棄するしが、しかたがなかつたのであらう。發明の進歩をとどめたり、科學の發達をおさへたりすることはむだであらう。戦争を終らすことはできなかつたし、有效な救濟を行ふことは不可能であつた。かくて救援はなかつた。そこで、失業者は運命を甘受した、——苦患のパンをた

へ水を飲んだ。

不幸は憎悪をうむ。これらの被害者は、かれらが、かれらから、かれらのパンをうばつた、と信ずるところの機械を憎悪した。かれらはそれらの機械を蔵する建物を憎悪した。かれらはそれらの建物を所有する工業家を憎悪した。『

かうみてくるとき、われわれはラツダイトの發生した理由がよくわかるようにおもはれる。すなはち、労働者はこれまでも機械によつてその生存がおびやかされてゐたのであるが、いまや戦争ことにオーダーズ・イン・カウシルの結果このころにいたりて經濟界が急激に悪化を見、その生活は窮迫をつける。そこで機械の脅威はいつそう深刻を加へる。したがつて、機械に對する呪咀がいよいよ大となり、これに對する反撥はますます強くなる。その結果機械破壊が極度に激烈となる。そこにラツダイトの發生を見る。かう解することができよう。そして、さう解するとき、はじめてラツダイトの發生した所因があきらかになるであらう。われわれはかく解することのうらづけをさらにつきに引くところの、かならずしも機械を排しはしない、ただこのくるしい時に、機械によりて、このくるしみをさらに加重しないでほしい、しばらく機械の採用を見合はせ、これを後日に延期してほしい、といふかれら労働者達の要望の中に見出すことができねばならぬとおもふ。

たとへば、ヨークシャーにおけるラツダイトのリングリーダーといはれたジョージ・メラリー (George Mellor) であさへ、かつてベン・オ・ベルにつきのごとくかたつたことがある。

『……もし、われわれが斷乎としてこれらの新奇な人力の代用品 (these new-fangled substitutes for human labour) の使用に反對すれば、われわれは、すくなくとも、親方 (Master) に、時世がよくなり、商賣が景氣づくまで、待つてくれるように強制することができるとんだ。戦争が終り、市場がどんとどんとたくさんを生産を要求するやうになれば、機械を次第にとり入れても、古いやり方で生ひたし新しい方法には役に立たぬ人達がこまることもないだらう……』

また、『シヤァリー』の中に見出される、職工の一人と例のモーアとの間にかはされる、つぎの會話も、よくその間の事情をものがつてあまりがあらう。

——御覽のとほり、われわれはこまつてをります。たいへんにこまつてをります。われわれの家庭はまづしく、疲弊してをります。われわれはこれらの機械のために仕事から投げ出されてゐます。われわれはなんにも仕事を得ることができません。われわれは金をもうけることができません。どうしたらよいでしやうか。われわれは、靜にして、といつて、癡ころんで死なねばならぬでしやうか。いえ、わたくしはりつばなことをいふことはできません、モーアさん、ですが、わたくしは、ものいへぬけだものやうに飢えて死ぬのは、理性あるものにとつては、はづべきことだとおもひます。わたくしはさうしたくありません。いや、しません。わたくしは、血を流すことをこのみません。わたくしは人を殺したこともなければ、人を傷けたこともありません。また、わたくしは工場を取り壊したり、機械を破壊したりすること (pulling down mills and breaking machines) に賛成しません。なぜかといへば、あなたのおつしやるとほり、そんなことをしたつて發明はとまらないでしやうから。だが、わたくしはものをいふつもりです。せいいつばい大きくどなるつもりです。發明は正しいことも知れません。しかし、まづしい人達が飢えるのは正しいことではないと、わたくしは承知してゐます。爲政者はわれわれをすくふ道を見出さねばなりません。かれらは新しい秩序をつくらねばなりません。あなたは、それはむづかしいとおつしやるでしやう。それなら、なほのこと、わたくしは驢を大にしてきけばねばなりません。なぜなら、それはど議員人達は困難な仕事に着手することをおこたりまじやうから。

——すきなだけ議員人を攻撃したまへ。とモーアはいつた。だが、工場主を攻撃するのははかげたことだよ。そして、わたしは我慢ができぬ一人だよ。

——あなたは、まことに、むづかしい人だ。と職工はことばをかへした。——われわれにしばらく時を貸してくださいませんか？あなたの改革をもつと延期してくださいるわけにはゆきませんでしやうか。²⁵

さらに、いま一つ、ヨークシャー・ラツダイトの發生原因としてあげうるものがある。それはノツチンガムにおける先例である。もとより、ヨークシャーは、もと、羊毛工業の地であるから、レース・ストツキング生産を主

とするノツチンガムとは、そこにいく分事情をことにするものがあるべきはいふまでもない。たとへばおなじく機械を破壊するといつても、まへのものにおいて主として編棒が対象となるに、あとのものにおいて主として切蠶機 (Shearing frame) がその攻撃目標となるがごとくである。しかしながら、つきにみるがごとく、まづ、ノツチンガム・ラツダイトがおこりてから後にヨークシャー・ラツダイトがおこつてゐる。もちろん、時の前後関係はかならずしも因果の關係をなしたとはかぎらない。しかし、この場合には、ヨークシャー・ラツダイトは、その呼稱・組織・統制・夜間の集會・宣誓等いくたの點において、ノツチンガム・ラツダイトからその範をとつてゐることは周知のところ²⁶⁾に屬してをり、さらに、ノツチンガム・ラツダイトが峰起してよりヨークシャーにおいて一部労働者達の間に、その情報を読讀すること風をなした²⁷⁾こと、また、ヨークシャー・ラツダイトの有力な領袖をもつて目せられるジョージ・メラーの一派が、その勤務せるジョン・ウッド (John Wood) の店におきて、ノツチンガムにおいておこなはれてゐたストツキングおよびレースの機械破壊がはじまつてから同様の方法で機械破壊するシステムをさかんに密議してゐた²⁷⁾ことが、いづれも、一八一三年一月における、ヨーク城内のラツダイト裁判の法廷にあきらかとせられてゐる。そして、それらのことは、ヨークシャー・ラツダイトの發生の因の一つにノツチンガム・ラツダイトをあげることをゆるすものでなければならぬこと、あらためていふまでもないところであらう。

以上、われわれはラツダイトがなぜ發生するにいたつたかをあきらかにすることをこころみた。それでは、そ

それはどう發生したか。つぎにそれをうかがつてみよう。

權威ある報告はそれをつぎのごとくしるしてゐる。

『一八一一年の春、ノッチンガムシャーの西南部およびデルヴァイシャーとライセスターシャーの境界地方の靴下・レース織に従事してゐる親方と職人の間に争論が發生した。その年の秋に入ると不満は高潮に達し、數百からなる暴徒が白晝アッシュフィールドのサットンに集合し、にくまれてゐた製造業者の靴下およびレース織編機を破壊した。この暴徒はヨーマンリの騎馬隊によつて驅逐せられ、指揮者の若干名が拘引せられ、ついでノッチンガムの牢獄の奉行に引きわたされた。この慘劇以後、不平の黨は慎重となつた。そして、この製造業者の使用する機械は構造がきはめてデリケートで、重い道具の一撃で役に立たなくなるので、このとき以後、ほとんど公然あるひは大集團で破壊を行はないで、個人または小人數で、夜暗を利用して、機械の防備がもつとも手薄なところで、その目的をはたす機會をねらつた。ノッチンガム附近の生産の事情はこの目的に都合がよかつた。かなり高價な機械は、普通、勞働者のものではなくて、親方または直接生産にたづきはらない人のもので、かれらはこの機械を一週いくらで職人に貸貸してゐた。かくて、機械は國內のあちこちに孤立した家屋に散在し、普通、機械を暴力から保護することになんらの利害關係のない人によつて保管せられてゐた。

騒擾の中心地であるノッチンガム附近においては不平黨は一定の團體を結成し、……冬の期間に多數の靴下とレースの機械を破壊し、所有者一同に大なる恐怖をいたかしめた。……犯罪の方法が方法なだけに、捜査はきはめて困難であつたが、それでも、強行せられ、ノッチンガムの春季巡迴裁判の囚人表によれば州の騒擾罪によつて極刑に所せられるもの十八名におよんだ。……一八一二年三月のノッチンガム巡迴裁判の直後、數週間以前からイングラント北部の産業地帯にみなぎつてゐた不満の氣分が發して公然たる暴動行爲となつた。そして、われわれは、羊毛・木綿の工場が主として建設せられてゐたヨークシャーの西南部、ランカンヤアの接壤地域、およびチェルシアーにラッダイズムがすぐ飛び火するを見た。』

これによつてみると、ラッダイトがそのラッダイトらしい相貌をあらはすのは一八一一年の秋のころからであるを知る。ペン・オ・ビルも『はじめてあたらしい機械のために動搖のきざしを見たのは一八一一年の晩秋で、場

所はノツチンガンであつたとおもふ』²⁹⁾といつてゐる。そしてヨークシャーにおけるラツダイトは、右によれば、一八二二年春にはじまることになる。さらに一八一三年一月六日水曜日、ヨークの法廷でパーク氏はつぎのごとく述べてゐる。

『おそるべき騒擾が久しい間この州につづいた。しかしながら、すくなくとも、余の知るかぎりにおいては、たたいま、ここに列席せられてゐる二名の判事が、昨年ランカスターの春季巡迴裁判より歸宅せられた時期以前には、たいしたものではなかつた。しかるに、同じ年の、ノツチンガンにおける春季巡迴裁判において、多数のものが、同州の製造業に聯關せる靴下編拵ならびにその他の機械を破壊せる罪に問はれたことは、わが國の歴史の一部をなすこと周知のところである。そのころに、本州のハツダースフィールド (Huddersfield) ならびにその地方の他の諸所において、同様の不穩の氣が發生して製造所に暴行を犯すにいたつた。そのいづれをみても、暴行が激發したのが一八一二年のノツチンガンにおける春季巡迴裁判のころ、くはしくは、その後となつてゐる。しかるに、ベン・オ・ピルはすでに一八一一年のクリスマス翌日、ヨークシャーのラツダイトの首魁と目されるジョージ・メラ (George Mellor) がかれにつぎのごとくかたつたむねを記してゐる。

『それからジョージはハツダースフィールドで進行中の計畫をちよつともらした。かれはいつた。『織物の製造・仕上げのいろいろの行程のいづれにおいても人手を排除することを製造業者におもひとまらせるための手段をとる必要がある。この目的のため人々は機械を使はず、また機械をとりいれるやうな店や工場では働かぬといふ、おごそかな誓約の下に團結しなければならぬ。人に對しても機械に對しても、いかなる暴力もふるはれてはならない。すくなくとも親方達が理に服すかぎりは。』この點については、ジョージは、すこしも問題はないと考へてゐた。『われわれが團結すればかれらはわれわれに對抗できはしない』とジョージはいつた。『われわれの弱點は行動する場合一致を缺き、方策をもたないところにあるのだ。もし、われわれが、斷乎としてこの新奇な人力の代用品に反對すれば、われわれは、すくなくとも景氣のよくなるまで待つように、親方を強制することができる。』³⁰⁾かくて、ベンは、ジョージの同志のものの會合に出席することを約してゐる。そして、ベンは、すでに一八一

二年の二月に事件がおこつてゐることを記してゐる。つぎのごとくである。

『われわれが、われわれの近傍における暴力行爲の最初のニュースを得たのは、二月の月であつた。ある土曜日の夜おそく、覆面をし、女装したり、變な帽子をかぶつたりして變裝した多勢の人達が、マーシユ (Marsh) のジョセフ・ハースト (Joseph Hirst) 氏の『仕上げ店』 (dressing shop) に侵入し、『仕上げ器』 (dressing frames) 、切蠶機 (shears) および、起蠶機 (egg-mill) の附屬品を破壊した。同様な災難は、クロスランム・ムーア (Crossland Moor) のウィートン・バレンソン (James Balleson) 氏とレインター (Leynor) のウィリヤム・ペンクランフ (William Hinchiff) 氏を見舞つた云々』

さらに、ジョージ一派が、すでに、一八二二年二月三日、リンドレイ (Lindley) におきて、ジョン・ハースト (John Hirst) の切蠶機 (Shearing frame) 六・切蠶器 (Shear) 二四對・切蠶盤 (Shear board) 一、を破壊した事件と同年三月一日には、フールストーン (Foolstone) におきて、ウヰリヤム・ニートン (William Newton) の住居に侵入して、その所有の銃三、銃劍一、を掠奪した事件の二つの件が一八一三年一月二日火曜日、ヨーク城内の法廷においてとりあげられてゐる。³⁴⁾ そうすると、前記の、ヨークシャーにおけるラツダイトの襲撃は一八一二年三月のノツチンガムにおける春季巡廻裁判の直後にはじまるとする記述は正確をかくといはねばならないことになる。それにしても、右二事件を記録する報告書の冒頭にかくのごとき記述がのつてゐるといふことはあまりにも變でなければならぬ。おもふにこれは、當時一八一二年四月二日におこなはれたカートライト (Cartwright) の工場襲撃事件が異常のシヨツクをあたへたことの反映なのではあるまいか。³⁵⁾ それはともかく、いづれにしてもヨークシャーにおけるラツダイトは、ノツチンガムにおけるその風のをぞんでおこつたもので、一八一一年の冬のおはりごろから胎動をはじめ、翌一八一二年の春まだあさいころに出生したものといつてよからう。それでは、この生まれた兒はいかなる身體で、いかなる行動をなすであらうか。われわれはまづ、その身體すなはち組

續からうかなと云ふこと。

- (1) Paul Mantoux, *Revolutions Industrielle au XVIIIe Siecle, Essai sur les commencemens de la Grande industrie moderne en Angleterre*, p. 422.
 - (2) Karl Marx, *Das Kapital* 10. Aufl. SS. 392—403. 邦譯・岩波文庫版、二〇三頁以下二二四頁
 - (3) K. Marx, *ibid.* SS. 392—398. 邦譯 岩波文庫版、二〇四頁—二〇六頁
 - (4) P. Mantoux, *ibid.* pp. 416—417
 - (5) O. F. E. Sykes, *Ben O'Bill's, The Luddites*, p. 31.
- この書物は愛蔵ベン・ケ・ウルと Benjamin Bamforth がラッダイト事件後五十年を経過した後に發表した回顧談である。内容は小説のまじなさをこぼさぬものである。それだけに資料としてどうかともおもはれぬでもない。しかし、Sykes 氏はこの外に、ベン・ケ・ウルとベン・ウルとを区別したの著述があり、しかも本書の序文とあつて “Ben O'Bill's” is *hostly* true, and the author has not felt called upon to vary in any material respects the story as it was gleaned in part from the tips and in part from the papers of the narrator.” と云ひつゝ、だから充分信じてよからうと云ふも、筆者はこれよりたゞんの例證をとることにした。それ、この書物の内容と、つきにかかひる書物(註9)は同一事件をとりあつてゐるところが多く、たとへば一枚の紙のうちにおもての題さへあるが、大切なところはよく一致してゐる。それによつても、わかれは、この書から例證をとることにはままたげなうと云ふであらう、とおもふのである。なほ、この書を利用することができたのは、この書をタイプして下さつた北海道大學の琴野孝氏の御厚意のおかげである。ここに、記してあつく深謝の意を表す。
- (9) Report of Proceedings under commissions of Oyer & Terminer and Gaol Delivery, for the county of York, held at the castle of York, before Sir Alexander Thomson, Knight, one of the barons of the exchequer; and Sir Simon Le Blanc, Knight, one of the justices of the court of king's bench; from the 2d to the 12th of January 1813. p. 2.
- (以下略) Proceedings at York Special Commission. 卷(48)

この書物の資料的価値はその序文の冒頭の數句によく示されてゐるとおもふから、ここに、それを引いて置く。つぎの如くである。

“The object of this Publication is, to afford authentic information on a subject which has been greatly, and it is to be feared purposely, misrepresented; namely, the real state of the manufacturing districts of the North of England, in regard to the disturbances which have lately prevailed there. With the view of correcting the misconceptions which have existed on this subject, it appeared that nothing could be so unexceptionable, and so satisfactory, as an authentic Report of what was proved upon oath before the learned Judges, who, under the authority of a Special Commission, lately sat at York for the trial of the crimes committed in the West Riding of that county; and, in a great measure, by witnesses who were more or less implicated in the outrages which were perpetrated.” ただし、これは裁判の記録である。しかし、それより、われわれはいくたの貴重な、そして有益な事實、資料を採取することができるとおもふ。本稿においてはできるだけこの書について例證を探究した。

(7) Sykes, *ibid.* p. 61

(8) Ernst Toller, Die Maschinenstürmer. I. iii. S. 11.

これは一八一一年ごろのノットンガムを舞臺としたドラマであること、周知のごとくである。エンサイクロペヂア・ブリタニカは史實に忠實であるとして機械破壊運動史の参考文献の中にこれを加へてゐる。もつとも、いまわれわれのとりあつたふところと多少の時差のずれがありうるが、當時の事情を舞臺とするために、この例をとりあげるのはさしつかへないであらう。

(9) *Ibid.* III. iii. S. 61.

(10) Sykes, *ibid.*, p. 19.

(11) Paul, William Godwin, Vol. I. p. 80.

(12) Zenker Der Anarchismus, 1895, S. 14.

(13) Sykes, *ibid.*, p. 7.

(14) Proceedings at York Special Commission, p. 39.

(15)
(16)
(17)
(18)
(19)
(20)
(21)
(22)
(23)
(24)
(25)
(26)
(27)

Sykes, *ibid.*, pp. 43—44

The Poetical Works of Lord Byron, London: Frederic Warne And Co., (The Landowne Poets.) p. 667.

Proceedings at York Special Commission p. 8.

Ibid., p. vi.

Prbceedings at York Special Commission, p. 2.

Charlotte Brontë, Shirley, Thornton ed. Vol. I., p. 31.

周知のごとくロントはヨークシャーに生ひだつてゐる。しかも、かの女の周囲はラッダイトにゆかりのある場所にはちかちてゐた。そして附近の村々の住人達の間には當時の語柄があふれてゐた。この小説の中に、かの女はそれらの見聞をとりいれてゐる。しかも、かの女はこの小説を書くため、わざと Leeds に出かけて、當時の新聞“Mercurius”をとりよるといふ慎重と筆意を失はせしめた。したがつて、ガスケル夫人(Mrs. Gaskell)はそのことについて“her studies were too closely accurate” (The Life of Charlotte Brontë, Ch. XVIII, p. 308) と評しなほつぎのごとくいふ、“People recognized themselves, or were recognized by others, in her graphic descriptions of their personal appearance, and modes of action and turns of thought, though they were placed in new positions, and figured away in scenes far different to those in which their actual life had been passed.” (*ibid.*)。もつて、本書が、ヨークシャーのラッダイトを理解するための有益なる資料となすに足ることを知るべきであらう。トントリもその著述(註に参照)の中で、當時の事情がこの書の中でよくうかがへるといつてゐる。

Sykes, *ibid.*, p. 6.

Ibid., pp. 86—87.

C. Brontë, *ibid.*, pp. 38—40.

Ibid., p. 48.

C. Brontë, *ibid.*, B. I. pp. 197—198.

Proceedings at York Special Commission, p. viii.

Ibid., p. 39, p. 138, p. 154.

(28) Proceedings at York Special Commission, pp. vi—viii.

Sykes, *ibid.*, pp. 6—7.

(29) Proceedings at York Special Commission, p. 36.

Sykes, *ibid.*, pp. 47—48.

Ibid.,

Ibid., p. 53.

(30) Proceedings at York Special Commission, p. 205. なお、この點については『三、行動』のはじめの部分參照。

(31) *Ibid.*, p. ix.

二 組 織

それではラッダイトはいかに組織されたか。

ラッダイトは一つの團體である。それは志を同うするものの集合よりなる團體である。したがつて、それがなりたつためには、まづ志をおなじうするものをおつめなければならぬ。しかるにラッダイトは單なる團體ではない。それは一つの祕密結社である。いはゆる非法法の團體である。その行ふところは國法に抵觸する。いきほひ、地下運動とならざるを得ない。したがつて同志をおつめることはきはめて慎重を要することいふまでもないところであらう。その人の平素の言動にてらしてこれなら大丈夫と安心のできるものにねらひをつけて、これを勧誘したであらうことは推察するにたかくない。しかし勧誘するには、まづ、ゆつくり、かたり合ふことが必要である。しかも、それは、人にきかれてはまづい。人にきかれないうつくりはなしあふために、かれらはいか

なる方法をとつたであらうか。もともと、かくのごときことは真相をとらへがたいところである。しかし、われわれは、さいわいにも、三つのたしかなケースをあげることができる。

その一つは、一八一三年一月七日火曜日、ヨーク城中に開かれたラツダイトの裁判における一證人の陳述の中にうかがはれるものである。この事件は、ヨークシャー州のホルム、ファースに住むジョン・ヒンクリツフ (John Hinchliffe) といふバリツシユ・クランクにして兼ねて歌の先生をしてゐる人が、一八一二年の七月二十二日の深夜、ピストルを携帶せる二名のものに戸外に呼び出され、一名のものに狙撃せられて眼に負傷したもので、容疑者としてあげられたる一名、ジョン・シヨフィールド (John Schofield) なるものについて、被害者ヒンクリツフが陳述せるところにつきのごとき事實があるのである。すなはち、シヨフィールドは相當期間ヒンクリツフに歌を習つてゐたのでヒンクリツフはシヨフィールドとは知り合ひであつた。この事件のおこるよりさき、たしか五月、ヒンクリツフはシヨフィールドに道で遭ひ、しばらく話しをし、ともに散歩した。その際シヨフィールドはヒンクリツフに、ラツダイトに加入するつもりはないかとたづね、かつ、自分はラツダの結社に加盟してゐると告げた。シヨフィールドは胸から一葉の紙片をとり出して、ヒンクリツフに讀んできかせた。ヒンクリツフは正確には記憶してゐないが、なんでも『萬能なる神の御名において』とか、『口外したものは罰せられる』とかいふやうな祕密を強要する意味のことがいろいろとあつた。シヨフィールドはさらにすすんで、王國はまさに立ちあがらねばならない、とか、かれらはすでに一聯隊手に入れた、とか、その他いろいろのことをいつた云々。

いま一つは同じくヨーク城におけるラツダイト事件の裁判で、一八一三年一月八日金曜日宣誓強要の容疑で起訴されたジョン・イードン (John Eadon) の審理において、彼に宣誓を強要されたる、リーチャード・ホエルス

(Richard Howells) の陳述の中に見られるところのものである。すなはち、リチャード・ホエルスは、前年(一八一二年)五月、ジョン・イーダンの家に居住してゐたが、同月二十一・二日ころ、イーダンはホエルスにオールド・エンヂン・フィールド (Old Engine Field) へ一緒に散歩しようときそひ、散歩の途中、『われわれがこれまで話したことについて君はどういふ意見であるか』とたづね、ホエルスが『なんのことかね』といふと、『いふまでもない、ラツダイトのことです。君にも一員になつてもらひたい。君がその氣なら、君をラツダイトにすることのできる人をわたくしは知つてゐる』といつた。そしてイーダンは相手がかはらないのを見ると、その人といふのは實は自分であるとあかして誓約を求めた。(誓約の件は後にあらためて説く) 云々。

そして、最後にあげようとおもふものは、例のベン・オピルの場合である。ベンも、また、シヨウジ・メラールと散歩の折に誘はれてラツダイトの會合に出席することを約し、その結果、加盟するにいたつたものであることを述べてゐる。

以上、三つの場合、いづれも、散歩の途上において勧誘がおこなはれてゐるをみる。なるほど、それなら、人にぬすみきせられるおそれも、まづないといつてよからう。そして、たまたま、われわれの眼にふれた三つのケースが三つながら散歩であるところをもつてみれば、かれらが同志を勧誘するには散歩を利用するのが普通であつたと推想してもよいことになるのではあるまいか。

それでは、散歩の途上、何がかたられたであらうか。何をかたたらうと、それは人々のかつてである。いろいろなことがかたられたにちがひない。それをあきらかにすることは藩のまさごをかぞえるよりもむづかしいわざで

あらう。だが、ひとつのことだけは、あきらかであらう。それは、結社の目的がたれたことはうたがひないといふことである。けだし、この散歩は同志を獲得するためのものである。しかるに、結社の目的をあかまずして同志を獲得せんとするは、なほ、針なくして魚をつらんとするとえらぶところがないであらうからである。それでは、そこでかたられるラツダイトの目的はいかなるものであるか。ベン・オ・ピルの場合、それは口でかたるのをきくかほりに文書になつた綱領(The principle of the order)の讀みあげられるのをきいてゐる。はなしよりも文書の方が正確明瞭であらう。だから、いま、それを引けば、つぎのごとくである。

『われわれは勞働の權利を主張し、資本の殘虐に抵抗するために團結せるものである。われわれは困窮せるものを救援し、哀傷するものを慰安せんことをつとむる。われわれは働くものに教へてその正當なる權利を知らしめ、その唯一の富は勞働であり、その唯一の生得權(Indemnity)は働くことである人々の、政治上、社會上ならびに經濟上の條件を改善することを目的とする。われわれの手段は説得であり、われわれの要求の呈示であるが、必要なる場合は、冷酷無情なる傭主達がわれわれの手の勞働に代へて使用せんとしてゐるかの人力の競争者たる機械の撤去である。しかしながら、これは他のすべての手段が盡き、われわれの正當なる主張が愚弄せられ、われわれの公正なる要求が拒否せられたる場合の最後の手段のみ。』

これで見ると、このラツダイトの目的は、まことに、けつこうなことである。おそらく、およそ、胸中一片の理性を存するの士ならば、これに異論をさしはさむ餘地を見出すことはむづかしからう。ただひとつのことをのぞいては。そのひとつのことといふのは機械の撤去といふことである。しかし、それさへも、萬策つきたるとき最後の手段といふことになつてゐる。もつとも、實際には、この最後の手段が最初の手段の觀を呈し、機械の破壊がラツダイトをラツダイトたらしむるにいたつた結果からみれば、それは一の疑瞞といへぬこともないわけである。そう、うたがつて、うたがへぬこともない。もし、そうでないならば、かれらは、なにをこのんで、つ

ぎにみるごとく、祕密を嚴守することにつとめ、あのやうな宣誓までする必要があらうか。所詮、綱領は綱領である。綱領は額面どほりにはいただきかねるものであるといふ例を、この綱領もまた示すものにすぎぬといはれても、しかたがないのではあるまいか。

それにしても、ただ機械破壊といふだけであるならば、それは單なる經濟上の問題にすぎぬといへぬこともない。すくなくとも、バイロン卿をしてソング・オブ・ザ・ラツダイツを歌はしめるまでにはいたらなかつたであらう。ヨーク城内におけるラツダイト裁判においてパーク氏に、叛逆よばはりをする餘地をあたへはしなかつたであらう。してみると、機械の破壊以上の目的がそこに伏在してゐなかつたとは斷ぜられないのではあるまいか。げんに、ジョージ・メラードはつぎのごとく揚言したといはれてゐる。

『われわれはさらに高くさらに遠く進撃するであらう。やがてわれわれはあらゆる假裝をすてきるのであらう。わたくしは胸に心をもつあらゆる人に、ともにロンドンへ行進するやうよびかけるであらう。われわれは道を大ノース街道にとるのであらう。われわれは途上のあらゆる農家を搜索して武器・食糧を徵發するであらう。われわれは各都市における、貧しきものの腎血をしぼつて富をなせる、すべてのものより、その代價をとるのであらう。われわれはすべての州のすべての館や城において、われわれの存在ならびにわれわれの力を知らしむるのであらう。われわれは世襲の特權を濫用してまづしきものを擄取盜奪せるすべての貴族の心膽を塞からしむるのであらう。われわれはわれわれの踏む一步ごとに勢を増し、目的を堅めて進み、やがて一大軍勢としてウェストミンスター¹の門に立ち、そこでわれわれの要求をとなりあげて意氣地なき議會より權利——それなくてはわれわれは奴隸におとし入れられる——その權利をしぼりとるのであらう。』

もちろん、かくのごときものが、ラツダイトのすべてのものの意識したところであるかどうかは、かるがるしうに斷定するをゆらさぬところでもあらう。しかしながら、すくなくとも、指導者の中にかくのごときを意識して

みたものがあつたといふことは、いなみがたいところとせねばならぬであらう。とすれば、これをもつてラツダイトの究局の目的とみるをさまたげぬことに、ならねばならないともいへようか。

勧誘に應じ、加盟を承諾すると、つぎに、宣誓をさせられる。宣誓は嚴重な儀式の下に行はれるを常としたようである。けだし、ラツダイトは秘密結社であり、事が露見すれば極刑を受けることを覺悟せねばならないのであるから、秘密の漏洩に對して極度に警戒をせねばならなかつたことは、容易に理解しうるところである。だから、宣誓がきはめて嚴重であるのはすこしも不思議ではない。それでは、それはいかに行はれたか。それはもとより極秘裏に行はれたものであり、外間の窺知をゆるさぬものであるはずである。しかしながら、さいわい、われわれは、それがヨークの法廷であかるみにさらされてゐるのを見ることができるといふことができる。一八一三年一月八日金曜日にそこで公開せられたジョン・マクドナルド (John McDonald) の陳述はその場の状況を彷彿せしむるに足るやうにおもはれる。むたくしは、しばらく、それをここに引くであらう。

『マクドナルドは誓約することに異議はない旨を述べた。マリンス (Malins) は『むたくしはあなたを一人の男のところへつれて行かう。その男はこの仕事をほとんど二十年間もやつてゐる。その男が今晚あなたのためやつてくれるでしやう。』といつた。それから、マクドナルドとマリンスはベインズ老人 (Old Baines) の家に行つた。そしてマリンスはベインズにいつた。『むたくしは友達を一人つれて來ました。彼はよそもんですが、非常によい人間で、兄弟になりたがつてをります。ベインズはこれにこたへて、『われわれは、ではやくやらねばならない。ここにもやがて看視がつかう。近所のものが密告をした、むたくしの家はよく搜索をうけてゐる』といつた。このとき、マリンスとベインズ老人のほかに、わかいジョン・ベインズ (John Baines the younger)、ジョージ・ダックワース (George Duckworth)、ウィリアム・ブラックボロー (William Blackborough)、および、サチャリヤ少年 (the boy Zacharia) が來てゐた。みんなは座してしばらく話をした。話のあとでまぎにみはりのことをいつた老ベインズはま

たそれをくりかへした。そしてマクドナルドは『すみ次第歸りましやう』といった。すると、ベインズ老人は、ちよつと小形の聖書ぐらいの大きき本をとつて、みなものゝに起立してくれといった。……みはりがあるから秘密が必要であつた。それでこのわかもへ譯者註、ザチャリア少年のこと)は、みなものが起立し、そしてマクドナルドは本を手にとるやう命ぜられたとき、ドアにひかつて立つやう命ぜられた。少年は儀式の進行中をうしてゐた。それからベインズ老人は『本を手にとれ』といった。マクドナルドはそうした。すると、彼は『こんどは君の姓名だ』といった。……『わたくしの姓名はジョン・スミス (John Smith) です』と彼はこたへた。(譯者註、マクドナルドはマンチエスタアのマジストレートの指揮下にあるアシスタント・コンステイブルで上田の命を受けてラツダイトの捜索にあつてゐたものである。故にかく變名を用ゐたのである。)そこでベインズが『ジョン・スミス、わたくしに附いていひなさい』といった。マクドナルドはそうした。……證人(譯者註、マクドナルドのこと)は宣誓の全部のことををかたることはできない。それは期待しがたいところである。……しかし、マクドナルドはあなたがたにその大意をかたるであらう。(譯者註、これは法廷においてパーキ氏が陪審官達に述べてゐるところである。だから、かういふいひかたになるわけである。)すなはち、かれはことばによつても、行爲乃至會圖によつても、發覺のおそれあることはなにもあらはしてはならない、これを犯せば罰として彼に最初に會ふであらう兄弟によつてこの世界の外におくられる、とか、彼はうらぎりものはたれでもこれを死をもつて罰する、萬一うらぎりものが出たならば、そのものは死の復讐をもつて追窮せられねばならぬ、とかである。そして、それから、彼は本をとり、この宣誓の肩かされることなきやう萬能の神の加護を乞ふた。それで儀式は終つた。』

この宣誓文はいはゆる『ラツダイトの宣誓』といはれるものであつて、内容はほとんど一定してゐたやうである。マクドナルドは全文をかたることができず、ただその大意をつたへたにすぎないが、さいはいにもその全文が當局の手に入り、一八一三年一月八日金曜日のヨーク城内のラツダイト裁判の法廷に公開せられてゐる。わたくしは、さきに、リチャード・ホエルスがジョン・イードンに宣誓を強要せられたことを述べたが、實はあの際、イードンはホエルスに宣誓文の紙片をわたし、そして、それが、證據物件として、法廷にもち出されたわけである。ついでに、宣誓のもやうをさらにあきらかにするために、當時の狀況から、あらためてうかがふことにしよう。

さきに、わたくしは、イードンが、ホエルスにラツダイトへの仲間入りを勧誘し、『仲間入りをする気があるなら君をラツダイトにすることのできる人をわたくしは知つてゐる』といひ、相手がことはらないのを見るや、ただちにその人なるものを示したが、それはかれ（イードン）自身であつたといふところまでを引いておいたのであるが、あのあと、かれは、ただちにその場で、宣誓の式をはじめてゐるのである。それでは、その宣誓の儀式は、いかに進行したか。パーク検事によれば、それは、つぎのごとくである。

『かれ（イードン）はだたちに一冊の本をとり出した。證人（ホエルス）は彼と同居してゐたので、それがコンモン・プレイヤー、ブック（Common Prayer Book）であることを知つた。そしてかれ（イードン）は『わたくしに……いひなさい』といつた。證人はそうした。そして、その本に接吻をした。囚人（譯者註、イードンのこと）はそこで、自分で書いた宣誓文をホエルスにあたへた。……囚人はかれにそれを大切にし、おぼえてしまふやうにいづた。かれはそうした後、それを第二の證人……トーマス・ブラウトン（Thomas Broughton）にわたした。ブラウトンは、それを南アボン國民軍勤務の一軍曹（a Sergeant in South Devon Militia）プリティジョン（Prettyjohn）にわたした。……そしてプリティジョンは、それを、かれの將校、その聯隊のラング（Lang）大佐にわたした。そして、ここにその紙片がある。云々』

それでは、その内容は、いかにあるか。パーク氏がヨーク城中で讀みあげたところにしたがへば、それはつぎのとほりである。

『わたくし、リチャード・ホエルス（この場合われわれはさういふであらう）はわたくしみづからの自由なる意志で、みづからすすんで、わたくしはたれにも發覺のおそれあるがごとき、ことは、あいづ、あるひは動作、のいづれによりても、發覺のおそれあることをあらはさないであらう、犯せば罰として最初にわたくしに會ふであらう兄弟によつてこの世界の外におくられることを宣言し、かつ嚴肅に誓約する。さらに、わたくしは、萬一、われわれの間にうらぎりのものが出た場合は、わたくしはかれを死をもつて罰するであらうことを宣言する。たとへ、かれが自然のはてまで飛び去らうとも、わたくしは追跡復讐する。わたくしは、す

べてのわたくしの兄弟とのあらゆる關係において、ただし、まことあり、まじめにして、かつ、誠實であるであらう。さらば、神よ、この、わたくしの宣誓のやぶることなきやう加護をたれたまへ。アーメン。』

いま、この宣誓文と、さきのマクドナルドのつたへた宣誓文の大意とを對照して見ると、當時、一定の形式の宣誓文があつたことを推しおしむるにたるものがあるのをおぼえざるを得ないやうである。もとよりことばのすえに、わづかの異同はあるが、それは、マクドナルドの述べるところが記憶にもとづくところであるのだから、やむを得ないといはねばなるまい。いな、マクドナルドの述べるところが記憶にもとづくにすぎぬにもかかはらず、そこにかくまでの近似が見出されるとき、われわれは、マクドナルドの見た宣誓文とイードンの出した宣誓文が、もと同一の文句であつたと、斷じてよいのではないか、とさへおもはざるを得ない。

ベン・オ・ビルも、もとより、さきのラツダイトの綱領を諒承したあとで宣誓をおこなつてをるが、その宣誓の文も、辭句の末に多少の異同はみられるが、主旨はほとんど同一である。つぎのごとくである。

『わたくし、ベンジャミン・バムフォースは、わたくしみづからの自發的な意志で、わたくしは、あめがしたのたれにも、この秘密な委員を構成する人の姓名・その行動・その集會・その住所・その服裝・その人相・その顔色、その他、およそ、これらの發覺のおそれあるがごときことを、ことばや行爲、あるひはあいづのいづれによりてもあらはさないであらう、犯せば罰として、最初にわたしたしに會ふであらう兄弟によつてこの世界の外におくられ、そして、わたくしの姓名と名譽は抹殺せられ、輕蔑と憎惡をもつてのほか、おもひ出されてはならないことを宣言し、かつ、誓約するであらう。そして、わたくしは、さらに、萬一われわれの間にうらぎりものが出た場合には、見つけ次第、即座にうらぎりものを、死をもつて罰することに最善の努力を致し、たとへそのものが自然のはてまで飛び去らうとも、わたくしはどこまでも追跡復讐することを誓約する。さらば、神よ、この、わたくしの宣誓の、やぶることなきやう加護と祝福をたれたまへ。』

いまこれらのはゆる『ラツダイトの宣誓文』なるものを見るときにかれらが秘密をまもるに汲汲としてお

たが、まさまざと、推想せられるであらう。まことに、かれらが秘密をまもるに汲汲としてゐたことは、おどろくべきものがあつたやうである。われわれはかれらが、盟友に、ただに入會のときのみならず、必要とみとめたるときは、随意に宣誓を強要し、また、製造業者の家を襲撃したる場合においては、その製造業者にその襲撃の事實について秘密をまもることの宣誓を強要してゐるのをさへみることができ、そして、そのいかに秘密をまもることにつとめ、その宣誓を強要することをおこたらぬかに驚嘆せざるを得ないものがある。まへのものの例としては、われわれは、後に述べるであらうところの、ホルスフオール (Horsfall) 氏暗殺事件の審理に際し、共犯ベンジャミン・オーカー (Benjamin Walker) その他のものが、事件の秘密を厳守することについて、仲間からあらためて宣誓を強要せられた事實が指摘せられてゐるのをあげることができ、¹³⁾ あとのものの例としては、例のベン・オ・ピルの回想の中に見出されるものをあげることができ、¹⁴⁾

かくのごとく、ラツダイトは非常にその秘密をまもりそのために嚴重な宣誓を強要したのであるが、それはそれだけの効果をもたらしたこともまた事實で、そのために當局は、ラツダイトの捜査逮捕に非常なる困難をなめつひに、さきにも、ちよつと、ふれたやうに、スパイを、ラツダイトの中におくりこむ、といふやうな手段をさへ、とらざるを得なかつたのである。しかし、それら、これに對する當局の對策は、後にあらためて述べる機會があるはずである。だから、ここでは、わたくしは、それについてかたることをやめ、いまわれわれの問題としてゐるところのラツダイトの組織についての考察をつづけてゆくことにしよう。

すでに述べたやうに、ラツダイトは秘密をまもるときは極めて嚴重である。したがつて、その目的のためとお

もぶが、かれらは、かれらの間にだけ通ずるあいづ (Sign) をもつてゐた。たとへば、右手を首のうしろにまはす、これは「おまへはラツドであるか」といふことを意味する。かうたづねられた仲間は、ひとさし指を二本あごにつけねばならない。かれらはまたあひことば (Ass word) をもつてゐた。それによつて集會に入場することのできるのである。それは、『仕事・勝利』(Work, Win) といふのである。これはベン・オ・ピルの加盟した結社でもちひられたものであるが、宣誓文の形式がさきに見たやうにほとんど一定にちかいたところからみても、これらはヨークシャーのラツダイトには大體共通してゐたものではあるまいか。すくなくとも、かかるサインズや、パス・ワーズが使はれたといふことは、もはや、うたがひのないところではなければならぬやうにおもはれる。そしてかれらの間では姓名をよぶかはりに番號をもちひることもおこなはれた。これもまた祕密保持と密接なる關係があつたのではないかとおもふ。これについては、後に述べるラツダイトの襲撃のところで、それが實際に使用されてゐる様子を知る機會をわれわれはもつことができるであらう。

かれらは、また、夜間集會 (nocturnal meeting) をし、教練 (drill) をさへしてゐる。かれらは集團で工場等を襲撃するのであるから、それにそなへて、かれらが教練をするのは、別にあやしむにもおよぶまい。ベン・オ・ピルは、兵隊あがりのジャツクといふものが得意になつてわかものたちに教練を實施してゐる光景を、しるしのこしてゐる。¹⁸⁾

かれらが、集會するとき、かれらはこのんで酒 (ale) をのむを常とした。¹⁹⁾ ことに襲撃の前夜にはそれが、とくに、はなはだしかつたことは、容易に理解しうるところであらう。そして、かかるとき、このんでクロツバーの歌をうたつたものごとくである。それはつぎのごとくである。

“Come cropper lads of high renown,
Who love to drink good ale that's brown,
And strike each hughty tyrant down,

With hatchet, pike, and gun!

Oh, the cropper lads for me,
The gallant lads for me,
Who with lusty stroke,
The shear frame broke,
The cropper lads for me!

“What though the specials still advance,
And soldiers nigty round us prance,
The cropper lads still lead the dance,

With hatchet, pike, and gun!

(refrain)

“And night by night when all is still
And the moon is hid behind the hill,
We forward march to do our will

エー・シー・エー・ラッシュ・イトに就いて

With hatchet, pike, and gun!

(refrain)

“Great Enoch still shall lead the van,

Stop him who dare! Stop him who can!

Press forward every gallant man

With hatchet, pike, and gun!

(refrain)

20)

ところで、酒はただではのめない。それには金がいることはいふまでもあるまい。かように酒をのむ金はどこから出たのであらうか。いな、ひとり酒の代ばかりではない。およそ、かかる結社をつくり運動する以上、なんといつても、軍資金がなければならぬことは、いなみがたいところとおもふ。それらの資金の源泉はそもそどこにあつたのであらうか。それはベン・オ・ビルにさへもわからなかつたところである。かれはその回想録のなからつぎのごとくもらしてゐる。

『ジョージは、あのやうに御馳走する金を、どこから得るのか、わたしは知らない。かれは、ほとんど、いつも、金をもつてゐた。そして金のないときには、酒場の亭主につけにしてもらつてゐた云々』

ベン・オ・ビルにさへもわからなかつたことがわたくしにわからうはづはない。といへば、それまでであるが、わたくしに、すこしく想像をたくましくするの権利がゆるされるならば、わたくしは、その権利を、しばらく、つぎのごとくふるひたい。

すでにあきらかにしたところのごとく、そもそもラツダイトの目的は、當時經濟狀態が非常に悪化したために生活苦にあへぐ、一般大衆、ことに勞働階級をすくふことにある。それだけに、これら生活苦にあへぐものたちとしては、ラツダイトに期待するところ大なるものがあつたのも、また自然の理であらう。かくて、これらのひとびとの限には、ラツダイトがいゆる世なほしの救世者と見えたであらうことは、推察するにたたくないところでなければならぬであらう。さすれば、これらのひとびとがラツダイトのために應援したであらうことは、うたがふべくもないのではあるまいか。もとより、これらのひとびとは、どれだけかくのごとき應援をする餘力があつたかは、疑問といへば疑問に屬するであらう。したがつて、かりに應援があつたとしたところで、それがどれほどのものであつたかといふことになる。ところほそいはなしでなければなるまい。しかし、そうはいふもの、かうは考へられないであらうか。すなはち、中小製造業者の中には、あたらしい機械を設備しようにも資金がおもふにまかせず、他人があたらしい機械を設備するのを見て、自分の將來を悲觀してゐるものもすくなくはなかつたであらう。かかるひとたちにとつては、ラツダイトの運動は、まことに、ねがつたり、かなつたりでこれこそ天の助けともおもはれたことであらう。それだけに、資金の援助もよろこんでしたであらう。他方、あたらしい機械を設備せる製造業者の方では、また、ラツダイトの襲撃をおそれ、これを迴避するためにすすんであるひは、恐迫をうけて、ラツダイトに金をおくるといふことも考へられよう。さらに、ラツダイトの運動が、革命的なふんひきを生じたことは、後にも述べるところのごとくであるが、そうすると革新急激な思想の持主たちの中にはゆるシンバも見出されたであらうし、また、富裕階級の中には將來の萬一にそなへてあらかじめラツダイトに款を通じておくを賢明なりと考へるものもなかつたとはいへないのではなからうか。最近、西ドイツ

の財閥連中の多くのものの政治献金は、左右兩黨に同時になされてゐたそうであるが、往年のイギリスに同様の先物買があつたとしても、おかしくはないであらう。また、ラツダイトがアクチヴに出て、かれらにおびえる製造業者から脅迫等により金を得てゐたであらうことも考へられる。當時、戦争の相手方たるフランスからの手がうごいていたと考へるのは、あまりにも想像をたくましくするの弊をまぬがれないであらうか。また、國內政争との關係はいかがあつたであらうか。不平組の政治家連の中に、はたして、これを利用せんとするものはなかつたであらうか。それは、ともかく、製造業者の中にはラツダイトをして同業者を襲撃させるために軍資金を提供したり、また、ラツダイトに脅迫せられて資金を提供したものがあるといふうらわさがあつたことは、ベン・オ・ビルが、つぎのごとくしてゐるによつても、これを知ることができよう。

「一人の仲間が室を出て行つたが、こんどはビールの大甕をもつてあらはれた。酒がみんなにまわつた。みじかいパイプでやすタバコがふかされた。たれがこの勘定を拂つたのか、わたくしは知らない。親方達の中に、恐迫せられて、襲撃をまぬがれるために金を出すものや、または、自分の近所の工場を襲撃してもらふために金を出すものがあるといふことを私は聞いてゐた。しかしたしかなことは知らない。ただ、そんなはながあつたといふことをしるしておくだけのことである。私の知つてゐるのは、わかものたちの間にはビールのきれることがなかつたといふことと、金がどこからはいつてきたといふことである。」²³⁾

そして、このうらわさにあたる事實は權威をほこる報告書の中において肯定せられてゐる。なほ、ウエツプは、羊毛工業以外の労働者達が資金を賺出したことをいつてゐる。それについては後に述べる機会があらう。

かくて、一定の目的の下に、人があつまり、金ができるところに、結社がなりたつをみる。しかるに、結社にはこれを統率指揮するものがなければならぬ。けだし、心なき鳥や獸の群にさへも、かならずや、その中には、

誘導の役目をはたすものがあるとき。いはんや、人の結社に、統率指揮をするものがなくてはかなふまい。かくて、たとへ、期せずしてあつまつた集團でも、ひとたび集團がなりたつときは、そこに、おのづから、その統率指揮をとるものがあらはれてくるのが常である。まして、志を同うしてあつまつた人々の結社、ことに、地下運動の祕密結社たるラツダイトにおいて、それは、なほさらのことであらう。それではラツダイトの統率指揮に任ずるものはいかにあつたであらうか。それについては、ラツダイトにはネツド・ラツドなるものがあり、これがすべてのラツダイトの首領であつたとする傳説がある。しかし、それを否定して、ネツド・ラツドなる人物はゐなかつたとする説もある。かくてネツド・ラツドなる人物の存否はいまにいたるまで解けざるな²⁴ぞのままのことである。この問題については、かつて、北野博士がくはしく論ぜられたところであるから、それにゆづる。ただ、わたくしのみるところでは、ネツド・ラツドの存否は、それほどたいした問題ではない。問題は、すべてのラツダイトが一人の統率者の指揮の下にあつたかどうかといふ點にあるとおもふ。そして、かりに、すべてのラツダイトが一人の統率者の指揮下にあつたとするときその統率者ははたしてだれであつたかが問題となり、そこで、それがネツド・ラツドであつたかいか問題となり、かくて、ネツド・ラツドが問題となるとき、はじめで、かれの存否が重要な意味をもつことになるべきであらう。わたくしは、そう、おもふ。それでは、すべてのラツダイトははたして、一人の統率者の指揮の下にあつたかどうか。それについては、わたくしは、そうではないとおもふものである。なるほどすべてのラツダイトはみなおなじやうなイデオロギーをもち、おなじやうな行動をしてゐる。そしてみづからをラツドの部下であるとし、ラツダイトと稱してゐたもののごとくである。だからちよつと考へると、ラツダイトは、みな、一人の統率者の指揮下にあるやにおもはれるのもむりではない。そし

て、そういふ考へが當時ひろく流布してゐたことは事實である。しかしながら、それに對して、たとへば、ヨークにおける裁判記録はその序文につきのごとく述べてゐる。

『おそろく、警員に自信をふきこむためであつたであらう、かれらは、自分達は一人の指導者の命令の下にあるのだ、といひふらした。その指揮者をかれらはレッド・ラッド (Red Lad)、あるひは、レッド將軍 (General Lud) といふ假名でよび、自分達のことをラッツ (Rads)、ラッダー (Radder)、あるひはラッダイツ (Raddies) とよんだ。實際にたれか一人の指導者があつたといふべき理由はなかつた。いづれの地區でも、不満がみなぎつてゐるところでは、野心のもつともつよいものが、その地方の指揮權をにぎつて、自分の地區でのラッド將軍となつた。これらの小暴君がこの運動の中心地のひそみにならつたことはうたがひないが、調査のかぎりでは、たれかの個人のひそみにならつたものではない。』

まつたく、そのとほりである、とおもふ。もとより、各地のラッダイトの間に同情はあつたであらう。たがひに氣脈を通じてゐる場合さへなかつたとはいへない。だが、だからといつて、みなが一人の統率者の指揮下にあつたと考へるのはむりとおもふ。ベン・オ・ピルの回想録をみても、どうも、そのやうなふしは見出すことがむづかしいやうである。

しかし、すべてのラッダイトが一人の統率者の指揮下にあるのではないとしても、そのことは、各地のラッダイトに、それぞれ統率者があつたであらうことを否定するものではない。それは、もちろん、あつたにちがひない。なければならぬはづであること、はじめに述べたところによつて、あきらかとおもふ。それでは、いま、われわれの問題とする、ヨークシャーのラッダイトにあつては、それはいかにあつたであらうか。

ヨークシャーにおけるラッダイトの統率者・指揮者はどんなふうであつたであらうか。それはただ一人であつたであらうか。それとも一人以上であつたであらうか。そしてそれはたれたれで、どんな人であつたであらうか。

そういふことに對して、いまのわたくしには、一々こたへることは不可能である。しかし、すくなくとも、わたくしは、かかるものの一人としてジョージ・メラーをあげることはできるともふ。かれは例のベン・オ・ピルの従兄弟であつて、ベンの回想録をみるとかれが一方の統率者の役割をはたしてゐたことはおほふべくもないやうである。ひとり、ベンの回想録のみではない、一八一三年一月のヨーク城内のラツダイト裁判の法廷にても司直のもの口より一度ならずかれをリング・リーダーと斷じてゐるのをきくことができる。すなはち、一月六日、水曜日、かれ自身の審理に際し、パーク氏は、陪審官にむかつて、『わたくしが諸君のまへに提供する證據よりして、この件（譯者註、カートライ氏 (Cartwright) の工場襲撃を指す）におけるリング・リーダーとみえるところのメラー云々』（……Mellor (who appears, from evidence) have to lay before you, to have been the ringleader in this business) といひ、また、同九日、土曜日、カートライト氏の工場襲撃犯人の審理に際しても、やはり、メラーについて『いまは亡き不幸な人の一人、（譯者註、このとき、メラーは、すでに前日死刑を執行せられてゐた）ジョージ・メラーはこの團體のもつとも活潑な指導者の一人であつたようにおもはれる。かれは一種の司令長官として行動した觀がある。』（……one of the unfortunate persons now no more, George Mellor, seems to have been one of the most active leaders of the body. He appears to have acted as a kind of commander in chief.) といつてゐる。そこで、わたくしは、ここにしばらくベンの回想録によりて、かれのプロファイルをえがいて、もつて、ラツダイトの統率者のおもかけをしのぶことにしよう。

かれは、ロングロイド・ブリッジ (Longroyd Bridge) 居住の切溝工 (Cropper) で、禮法にかなつた男子。身長、大フイット、肩ひろく、強健、そのあたたかい握手は人の血をわかすに足る。眼は鳶色、情熱をたたへ、暗赤褐

色の髪はまるい頭にゆたかに波うつ。気性ははげしけれども、悪意はない。卑劣な言行なく、過つて改むるにやぶさかでない。早く父を喪ひ、母はジョン・ウード (John Wood) なる中流の製造業者と再婚する。ウードは冷血漢で、かれはその虐待に憤激して出奔し、しばらくその行くところを知らず、²⁹⁾ 法廷でメラーはロシアに行つたことがあると司直のいふのが、あるひはこのときのことであらうか。²⁰⁾ しかしながら母のなげきをおもふて忽然と歸宅。歸宅後は義父の家に子としてでなく一個の職工としてはたらくことをみづから申し出る。³¹⁾ 司直の口から『製造業者ジョン、ウードの店の職工メラー』³²⁾ といはれるのはけだしこの事情によるか。

かかるかれの性格は、かれをして大衆の困窮を坐視するをゆるさなかつたのであらう。たまたまノツチンガムのラツダイトの事件おこるやこれに刺戟されてラツダイトに加はる (あるひは結成したといふべきか)。黨中にあつては、中心人物となり、かれの行くところかならず波瀾の生ずるを見る。かれはあだかもものにつかれたるものごとく諸方を奔走し、毎夜、黨員を勧誘し、深夜の襲撃を準備し、この店舗により、あの店にまはり、ある人に忠告し、他の人は説きつけ、どこにでも行き、人々の要求・悲哀をたづねる。どの親方は放つておくべきかどの親方を攻めるべきかはそのあきらにすところ。まつたく、寢食をわすれたる奮闘ぶりである。かくて、すべての人の敬受が一身にあつまる。³³⁾ どんそこ生活にあへぐ人々は、メラーを信することあつく、かれ、また大衆の信頼をよるこぶ。道で老人がかれをつかまへて、世辭を述べ、まづしき人々へ忠實であれ、といふにあふがごときは、かれのもつとも愉快とするところ、かかるときには財布の底をはたいて相手にあたふるを常とする。かれもと權力をこのむ。およそ、命令し、服従せられ、信頼を受け、敵からは畏怖せられるのをこのまぬものはあるまら。けだし、人情の自然といふべきか。³⁴⁾

かれは、ウイリアム・ホルスフォール暗殺、ウイリアム・カートライト氏の工場襲撃、その他切義機破壊二件および銃器盗奪一件等かすかの重罪によりて起訴せられ、死刑を宣せられ、絞首臺上の露と散る。時に一八一三年一月八日、行年二十二歳³⁰⁾。

ただし、これはこれ、もと、メラリーの莫逆の友、ペンのいふところによりてえがいたるもの、當時の爲政者からみれば、生命財産に危害を加へることをもつて武器となし、たまたま、おのれの意にさからふものあれば、ほしいままに、これにむかつて、この武器を行使用するがごとき、まさに、ブリトン人の名をはづかしむるもの、また、みづから神にそむきながら、神の名によりて、共犯者に祕密の嚴守を宣誓せしめ、復讐をもつてこれを脅威するがごとき、神をおそれざるのはなはだしきもの、まことに稀代の不逞の輩といふことになる³⁰⁾。

なほ、ヨークシャーにおけるラツダイトの指導者についてかたる場合、フランスの將校がラツダイトを訓練し、指揮したといはれてゐること³⁷⁾、および、ブロンテが、『かれらは、よそのものであつた。大都市からの密使であつた。かれらの多くは職工階級 (operative class) のものではなかつた。かれらは、主として、くひつめもの、破産者で、いつも借金で首がまはらず、たいてい呑んだくれてゐたひとりと、——失ふべき何物をもたず、——名聲、金、清廉等といった方面で——すいぶん得をするひとりとであつた』³⁸⁾といつてゐることは、示唆をふくむものとして、看過するをゆるさぬところと、いはねばならぬかとおもふ。

- (1) "...the malcontents organized themselves into regular bodies,..." Proceedings at York Special Commission, p. vii.
(2) ナイト (註) "...mischievous associations, dangerous to the public peace, as well as destructive of the property of individual subjects, and in some instances of their lives,..." *ibid.* p. 2.

(3) *Ibid.* pp. 74—103

Ibid. p. 76.

(4) *Ibid.* pp. 104—133.

(5) *Ibid.* p. 106.

(6) Sykes, *ibid.* pp. 41—48.

(7) *Ibid.* p. 61.

(8) *Ibid.* p. 117.

(9) Proceedings at York Special Commission, pp. 117—118. 這裏に引く他の証書文と比較に便するため、アムステルダムがたゞく大罪の証文をここにのみ記す。

But he will tell you the purport of it; that he must not reveal any thing that might lead to a discovery, either in or by word, sign or action, under the penalty of being sent out of this world by the first brother that might meet him; and that he would punish by death any traitor; and should any arise up amongst them, he was to be pursued by vengeance to death. And then he took the book, and called upon the Almighty to assist him that he might keep that oath inviolate. *ibid.* p. 118.

Ibid. p. 106.

(11)(10)

“I, Richard Howells” (we will say in this case) “of my own free will and accord” (it is wrongly spelt) “do declare and solemnly swear, that I will never reveal to any person or persons any thing that may lead to discovery of the same, either in or by word sign or action as may lead to any discovery, under the penalty of being sent out of this world by the first brother that may meet me. Furthermore I do swear, that I will punish by death” (so that even assassination or murder is to be in their judgment acceptable in the sight of God) “any traitor” (that is, traitor to themselves) “any traitor or traitors, shall there any arise up amongst us. I will pursue with unceasing vengeance, should he fly to the verge of statute” (I suppose it should be verge of nature). “I will be just, true, sober and faithful in all my dealings

with all my brothers. So help God to keep this my oath inviolated. Amen." *ibid.* pp. 106—107.

(12) "I, Benjamin Bamforth, of my own voluntary will, do declare and swear that I will never reveal to any person or persons under the canopy of heaven the names of the persons who comprise this secret committee, their proceedings, meetings, places of abode, dress, features, complexion, or anything else that might lead to a discovery of the same, either by word, deed, or sign, under the penalty of being sent out of the world by the first brother who shall meet me, and my name and character blotted out of existence, and never to be remembered but with contempt and abhorrence. And I further do swear to use my best endeavours to punish by death any traitor or traitors, should any rise up among us, wherever I may find him or them, and though he should fly to the verge of nature I will pursue him with unceasing vengeance, so help me God and bless me to keep this my oath inviolate." Sykes, *ibid.* pp. 61—62.

(13) Proceedings at York Special Commission, p. 54, p. 72.

Sykes, *ibid.* pp. 92—93.

Ibid. p. 63.

Ibid. p. 61.

Proceedings at York Special Commission, pp. vii.

Sykes, *ibid.* pp. 66—67.

Ibid. p. 65, p. 97. etc.

Ibid. pp. 65—66.

Ibid. p. 97.

Ibid. p. 65.

(23)(22)(21)(20)(19)(18)(17)(16)(15)(14)(13) ...they followed the example of their Nottinghamshire brethren, in...exacting a tribute from all manufacturers in the same trade within their districts,... Proceedings at York Special Commission, p. viii.

(24) 北野大吾博士、ラダイン運動略史、社會經濟史學第六卷第五號一一頁—一四頁

(25) *Proceedings at York Special Commission, p. vii, p. viii.*

(26) *Ibid.* p. vii.

(27) *Ibid.* p. 39.

(28) *Ibid.* p. 138.

(29) Sykes, *ibid.* p. 39

(30) *Proceedings at York Special Commission, p. 52.*

(31) *同上*

(32) *Ibid.* p. 39.

(33) Sykes, *ibid.* pp. 87—88.

(34) *Ibid.* p. 97.

(35) *Proceedings at York Special Commission, p. xvi, p. 35, p. 104, p. 134, p. 205.*

(36) *Ibid.* p. 72.

(37) J. L. Hammond and B. Hammond, *The Skilled Labourer, 1760—1832, p. 317.*

(38) C. Broné, *ibid.*, II. 95—96.

本稿は昭和二十五年度文部省人文科学硏究費によつておこなはれた、共同硏究『イギリス資本主義の成立と古典派經濟學』にお
いて、わたしらの分擔した「ラッダイトの硏究」の成果の一部である。ここに附記して感謝の意をあらはす次第である。